

小グループによる自主的な調査・研究を中心とした授業

特別支援教育講座・山下 光

(1) 授業の概要

この授業は、特別支援教育教員養成課程を含む教員養成課程の必修科目であり、3回生に担当されている。小学校、中学校における「総合的な学習の時間」に対応する学習内容である。小グループに分かれた上で、グループ毎にテーマを設定し、文献や実地調査を通して「総合的な学習の時間」を企画・運営するためのスキルを学ぶ。また、学習の成果を、口頭でのプレゼンテーションと、レポートで表現することが可能になることが授業の到達目標となる。これは教育学部のディプロマ・ポリシーにおける「教育活動に取り組むため、高い技能と豊かな表現力を身につけている。(技能・表現)」、「自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。(関心・意欲)」の2点に深く関わっている。

登録受講生は特別支援教育教員養成課程聴覚言語障害コースの3回生全員(11名)であった。

(2) 実際の授業の展開

授業時間は木曜2時限であり、授業のスケジュールは以下の15回であった。

1. オリエンテーション
2. テーマに関するディスカッション
3. グループ分けとディスカッション
4. 情報の調べ方(講義)
5. グループディスカッション
6. 中間発表会
7. グループ毎の調査活動
8. グループ毎の調査活動
9. グループ毎の調査活動
10. グループ毎の調査活動
11. レポートの書き方(講義)
12. プレゼンテーションの方法(講義)
13. グループ毎の調査活動
14. グループ毎の調査活動
15. 発表会

ただし、本コースの場合、受講者の聴覚特別支援学校での教育実習の期間が様々であるため、授業カレンダー通りの開講ができず、木曜の5、6時限を利用した補講を行った。

教員が主として講義形式で授業を行った1、4、11、12回目以外は学生による自主的な運営を行った。

1回目の授業では授業の目的や今後のスケジュール、参考文献の紹介などを行った。また、各自が次回の授業までに自分が興味のあるテーマを複数考えてくるように助言した。その際、普段勉強している特別支援教育や障害者福祉に関するテーマは避けるように指示した。これは受講生が将来、専門領域だけにとどまらない広い視野と、柔軟な思考を持った教員になって欲しいという願いと、課程やコースの専門科目の授業内容をもとにした安直なテーマ設定によって授業本来の目的が失われるのを懸念したからである。

2、3回目の授業では最初に司会者、書記を選出させ、それ以降は司会者を中心に討議を進行させた。

3回目の授業で、それまでに出たテーマ案の分類、整理を行い、「錯視とトリックアートについて」、「アンパンマンとやなせたかし」、「アニメーションに登場する料理について」の3つのテーマが採択され、それに興味に合わせて3つのグループが編成された。

4回目の授業ではこの授業での過去の発表例を紹介した後、インターネット、図書館等での資料の調べ方について説明した。

6回目の授業では各グループの代表が、グループ毎のテーマと最終目標(何を明らかにするか)、調査方法等について発表を行い、それに対して担当教員がアドバイスをを行った。

その後の調査活動はグループ毎に行い、教員は各グループを巡回して適宜指導をおこなった。また、グループによっては大学図書館に移動しての活動を行った。

11回、12回はそれぞれレポート作成、プレゼンテーションの方法について、用意したプリントや視聴覚資料にもとづいた講義形式の授業を行った。その中では、特に著作権や知的財産権についての説明、他人の著作や意見を引用する場合の注意について解説した。また、剽窃や最近問題になっているインターネット等からの、いわゆるコ

PIPEの問題点についても学生の注意を喚起した。

また、各グループは授業時間外でも自主的に調査活動を行った。「錯視とトリック・アート」グループは実際に多くの図版や模型の制作を行った。「アンパンマン」グループは有志が高知県のアンパンマン・ミュージアムまで実施調査に赴いた。「アニメーション料理」グループは、メンバー各自が最低1つの料理を自作し、レシピ、写真、感想をまとめた。

最終の発表会は、授業最終回に時間を変更して実施した(2月16日の6時限)。聴覚言語障害コースの教員全員がオブザーバーとして参加した。

各班ごとに交代でプレゼンテーション・ソフトとビデオ・DVDを使用した口頭発表を行った。

「錯視とトリック・アート」グループは、単に書籍やインターネットで調べた内容だけでなく、実際に立体造形や模型を制作、展示するなど聞き手を参加させて関心をもたせる工夫しており、他のグループの学生からも評価が高かった。

「アンパンマン」グループは、原作者であるやなせたかしの人生や作品によせた思い、作品の歴史の変遷、学生のアンパンマン体験等について、図書館での古い作品の調査・発見、アンパンマン・ミュージアムへの実施調査、学生へのメールを使用したアンケート等、各メンバーがそれぞれ得意とする方法で調べて、それを発表した。「アンパンマンが初めて登場した時は、パンを持った普通のおじさんだった」など、担当教員も初めて知る話も多く、また作者の人生観、平和観等も他の学生の関心を引きつけていた。圧巻はグループの一人が複数の作品から推定して焼き上げた実物大アンパンマンの顔(本物のアンパン)で、学生達はその迫力に圧倒されていた。

「アニメーション料理」グループは、交代で自分が作った料理と、それが登場したアニメーションを紹介した。内容的にはアニメーションの世界観と料理が出てくる場面(特にそれが象徴する人間関係や家族関係)について考察したものが多かった。また、このグループも、お菓子の家等の実作品を出展した。

それぞれの発表に対して、質疑応答と学生による相互評価が行われた。その後で、教員による講評と授業アンケートを行った。その後は、展示作品を改めて体験したり、賞味したりしながら反省会を行った。また、授業終了時にレポートを回収した。

成績は、準備段階における積極性や貢献度、発表内容、発表態度、及びレポートの形式、内容によって総合的に評価した。また、期間中に体調を

こわした学生もあったが、評価の対象にならない1/3以上の欠席者はいなかった。

(3) 授業評価

最終授業(発表会)終了後の自由記述形式のアンケートでは、「初めて取り組んだことが多かったのが楽しかった」、「調べている中で、次々と疑問が出てきて、それを自分で調べるのがやりがいがあった」、「グループのメンバーの中での意見の調整が大変だったが、自分では想像もしなかった意見も出て、おもしろかった」などの好意的な回答が多かった。ネガティブな意見としては、「教育実習等で忙しい3回生の後期に設定されているのが疑問である」、「集中講義の方がいい」、「今年で廃止になると聞いているので、何かむなしい感じがした」、「楽しかったのが、なくなってしまうのは残念」などがあった。

(4) 反省点と総括

今年度で基本的には廃止となる授業であり、正直なところ担当教員としても、やや動機づけが低い状態で授業の開始を迎えた。また、学生も2回の教育実習の直後であり、当初はやや授業への積極性が低い様子が感じられた。

しかし、具体的なテーマが決まってからは徐々に活発なディスカッションや活動がみられるようになってきた。最終の発表会のプレゼンテーションは、構成や時間配分には問題も多かったが、内容的には期待していた以上のものがあり、聞き手を楽しませるための工夫も随所にみられた。また、それを可能にするために、それぞれの関心や得意を生かした分業と共同が行われており、小グループでの活動の意義が感じられた。

学生からの意見にもあったように、教育実習が行われる3回生の後期にこの授業が配当されているのは問題である。特別支援教育教員養成課程では小学校と特別支援学校の2回の教育実習が連続的に実施される。特に、聴覚言語障害コースでは地域の特別支援学校での実習を実施しているため、学校によって実習期間に幅がある。全員が集まれるようになるには、開講を遅らせざるを得ない。そのため、複数回の補講が必要となり、担当教員にも受講生にも負担となった。

カリキュラムの改正により、この授業は今年度で廃止になる予定であるが、学生がグループで時間をかけて自主的な調査活動を行う機会は貴重なものであり、今後どのような形でこれを補償していくが大きな課題であると考えられた。